

【2014/3/21 経済学部ワークショップの様相】

《近代滋賀県の産業発展と女性の労働・生活・教育》

昭和戦前期滋賀県の綴方・読方教育と子どもたち

～『赤い鳥』『近江教育』『読方教育』との関わりを軸に～

坂尾昭彦（湖南市立甲西中学校教諭）

1918年、鈴木三重吉は北原白秋や芥川龍之介らの協力のもと、子どもたちに芸術性の高い童話と童謡を提供することをねらいとして『赤い鳥』を発刊、児童の投稿作文の掲載も注目された。鈴木三重吉は作文教育の改革にも情熱を燃やし、空想ではなく、見たまま、聞いたまま、考えたままを素直に書くことを求めた。

滋賀県でも、古保利小学校の児童であった木俣修が『赤い鳥』創刊号を手に入れている。木俣自身、後に40点もの作品を『赤い鳥』に掲載され、北原白秋の門を叩き、歌人の道へと進んでいる。滋賀県では1918年の第一巻第四号に、日野小学校児童の綴方が『赤い鳥』に掲載されたのを皮切りに、県内20小学校から、綴方23、自由詩111、自由画9が1929年までに掲載された。滋賀県教育会発行雑誌『近江教育』に綴方や読方教育について多数の文を寄稿していた女子師範附属小学校の河村豊吉、滋賀県師範附属小学校の秋田喜三郎、後に近江歌人連盟を結成する桜川小学校の米田雄郎、前期『赤い鳥』で58作品も掲載された百瀬小学校の前川仲三郎が指導者として知られた。

鈴木三重吉の病気のため一時中断していた『赤い鳥』は、1931年に復刊する。この後、鈴木三重吉が亡くなる1936年までの間に、滋賀県内9小学校から、綴方4、自由詩310が復刊『赤い鳥』に掲載された。特に綴方2、自由詩194もの作品が掲載された愛知川小学校が特筆される。1931年に河村豊吉は愛知川小学校に赴任し、奇しくも鈴木三重吉と同じ年に亡くなるまでの間、滋賀県の国語教育の中心的存在となった。姫路の芦田恵之助が提唱した「芦田教式」を発展させた国語科授業方法について研究する「田楽会」を開いたり、「田楽会」の雑誌『和光』や、『小学国語読本学習書』『国語学習読本』を発刊したりした。「田楽会」に学んだ小島泰三、藤居貞之助らは、児童の個性を重視し、生活の中で得た感性を大切にした。『和光』に集った押立小学校の道明やをなど、女性教員の活躍も注目された。

河村豊吉亡き後、軍事郵便の綴方など、着実に軍国教育が浸透していく中、大野小学校の田中秀雄は『近江教育』や雑誌『読方教育』で、関東語でなく関西語による綴方や読方の大切さを訴えたり、アクセントや仮名遣いについて文語ではなく口語を重視

することを、また、左横書きを提唱したりした。しかし、田中秀雄の考え方は非難され、京城へと追いやられる。その後の消息は不明となり、戦後も全く注目されることはなかった。(坂尾昭彦)